寢息を窺ふとよふ寢入つて居りますので、そつと床を脱け出で、彼方にあつた着物を取つて、自分の姿の寫らんやうにパツと行燈に振掛けて、火鉢に掛つてありました銀瓶を提げまして敷居へスーツと湯を流し、音せぬ様に障子を開けて緣側へ出ますと雨戸の敷居へ湯を流してスーツと開けますと、今日しも十五夜の月が皎々と冴え渡つて居ります、前は廣々たる奥庭で正面が築山になつて居ります、庭前へヒラリと飛降りると飛石傳ひになつて向ふに泉水がある、それに土橋が架つて、傍らに燈籠があつて、此處には亭座敷が設へて御座ります、築山には植木がコンモリ茂つて御座ります、孃さんはバタ〳〵と築山に登りましたが、馴れて居ると見へて此方の雪見燈籠に足を掛るなり松ケ枝を持つとヒラリと高塀に飛附きますと、其向方は常念寺の墓場で、高塀の上から一番高い石碑に足を掛けて飛降りました、暫らく彼方此方を透して居りますと、向ふに青竹が三本遣り違ひにしてある、是れを俗に浮世竹と申します、新佛と見へまして、其の青竹をキリ〳〵と長襦絆の袖に卷附けて引抜きました、ガサ〳〵と其處を堀起して引摺り出しました棺桶は五斤入りの砂糖桶の様な棺桶で、縛つてある縄をプツ、と齒で切つて中からズ〳〵ルと引摺り出しました佛さんは、生れてまだ二十日になるやならず、天然痘に罹つて死んだものと見へて慘しい事、一目見ても身の毛が疎立つぼかり、其の嬰兒(あかご)の首筋と足を持まして、さも嬉しそうにニンマリ笑ひながら腕の處をバリ〳〵と咬んでチュウ〳〵と血を吸ひながら、

「アー、妾ほど世に因果な者が又とない、生れ落ると何の因果か知らねども、人間の生血死血を吸ひたいが病氣、今日は此の寺に嬰兒の新佛があると聞くより飛び立つ様に思へども、今宵ばかりは慎みませうと、ジツと堪へて居たなれど、刻移らば嗜まれぬが身の因果、定めし今宵お越遊されしお婿さんも、妾の此の淺間敷い姿を御覽になつたら定めし愛想をお盡しあそばすで御座りませうが、何卒妾をふびんと思召して一生添遂げて下さりまするやう、何うしても此の味ばかりは忘れられませぬ」

バリ〳〵、チュウ〳〵、夫れに引替へて此方の座敷では若旦那、

「お手許は御面倒様ながら……お有難うさんでござります、ムニヤ〳〵……ア、、、(ボン鐘